

東京都立築地産院における母子感染予防処置児の追跡成績

多田裕^{1, 2)} 佐藤紀子²⁾

要約：HB_e抗原陽性の母親から出生した児382例に予防処置を実施したところ、キャリアと成ったのは臍帯血陽性例を含め3.9%で、96.1%はキャリア化を免れた。しかし、一過性の感染を示すHB_c抗体の持続的な上昇あるいは再上昇を示す例がHBIGの静注併用例で18.5%、HBIG筋注例で51.6%に認められた。1才以降のHB_s抗原陽性例やHB_c抗体再上昇例を防ぐため、抗体産生能の高いワクチンの使用が望ましいと考えられた。

見出し語：

HBIG、HBワクチン、遺伝子組換えワクチン、HB_c抗体

研究方法：HB_e抗原陽性の母親から出生した児に対し、HBIGとHBワクチンを用いて母子感染予防処置を行った。HBIGは原則として出生直後と2カ月に投与し、HBワクチンは生後2、3、5カ月に皮下に接種したが、能働免疫により抗体価がPHA法で8倍以上に上昇しない場合には、抗体価が上昇するまでワクチンの追加接種を行った。また一旦上昇したHB_s抗体価が8PHA未満に低下した場合には、ワクチンを追加接種し3才までは抗体価を8PHA以上に維持した。3才以降は抗体価が減少してもワクチン接種

は行わずに追跡し、血中のHB_s抗原・抗体およびHB_c抗体の変動を見た。

結果：

1) HB_e抗原陽性の母親から出生した児に対する予防効果：

東京都立築地産院で出生したHB_e抗原陽性の母から出生した児382例の内臍帯血陽性の2例を除く380例を対象にHBV母子感染予防処置を行った。当院での追跡が6カ月未満の19例を除き361例を6カ月以上追跡したが、HB_s抗原陽性のキャリアとな

¹⁾ 東邦大学医学部新生児学研究室 Dept. of Neonatology, Toho Univ. School of Medicine

²⁾ 東京都立築地産院小児科 Div. of Pediatrics, Tsukiji Maternity Hospital

った児は12例(3.4%)で、このうち1カ月以内の早期に陽性となった児が4例で、1才以降の陽性が7例であり、1例は予防処置を途中で拒否しキャリアとなった症例であった。

その他の349例は予防に成功したが、このうち2例に一過性のHBs抗原の出現を認めその後HBs抗体が陽性になった。345例はHBs抗体が上昇し、3回のワクチン接種のみでは抗体の上昇を認めず、ワクチンの追加接種を行った例もあったが、長期の追跡を行った例では全例で抗体価の上昇を認め、真の無反応者は認められなかった。

2) HBc抗体の陽性頻度

予防処置を行った児の内、HBs抗原が出現した児を除き、2才以上追跡した児のHBc抗原の陽性率を見た。

HBIGの投与方法との関連を見ると、表に示したように出生直後に静注用のHBIGを投与し1日目に筋注用のHBIGを投与した児では243例中45例(18.5%)が一過性の感染を示すHBc抗体の上昇を示したがこの内15例は2才以降に一旦下降したHBc抗体が再び上昇した。

一方、出生直後にHBIGの筋注のみを行った、院外で出生し1カ月以降は当院で院内出生児と同様の処置を行った児では、31例中16例(51.6%)がHBc抗体の上昇を示し(この内6例が2才以降のHBc抗体再上昇例)、HBIG静注併用群より高頻度に一過性の感染を経過していた。

3) HBs抗体獲得に及ぼす使用ワクチンの影響 プラズマ由来のワクチンでは、規定の3回のワクチン接種では抗体価の十分な上昇が認められず、4回目のワクチン接種を行った児が131例中18例(13.7%)であった。

遺伝子組換えによるリコンビナントワクチンでは、34例の全例が3回のワクチン接種により能動免疫を獲得し、その後のHBs抗体低下にともなう追加接種の回数も少なかった。

考察：我々の実施した方法では、HBe抗原陽性の母親から出生した児でも、96.1%と高率に母子感染によりキャリア化を阻止し得たが、これは能動免疫獲得が確認されるまでワクチン接種を行い、その後も3才までHBs抗体を8PHA価以上に保つ様に追加接種を行った結果である。しかし、遺伝子組換えによるワクチンを接種した場合には3回のワクチン接種で全例能動免疫を獲得したことが確認されており、今後抗体産生効果の高いワクチンを用いれば、予防効果はさらに改善するものと考えられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:HBs 抗原陽性の母親から出生した児 382 例に予防処置を実施したところ、キャリアと成ったのは臍帯血陽性例を含め 3.9%で、96.1%はキャリア化を免れた。しかし、一過性の感染を示す HBc 抗体の持続的な上昇あるいは再上昇を示す例が HBIG の静注併用例で 18.5%、HBIG 筋注例で 51.6%に認められた。1 才以降の HBs 抗原陽性例や HBc 抗体再上昇例を防ぐため、抗体産生能の高いワクチンの使用が望ましいと考えられた。